東京工芸大学工学部における英語プレゼンテーション必修化
ーアクティブ・ラーニングの導入と合同発表会の効果ー

重光　由加[*1]　鈴木　幸[*2]　星野　芳恵[*3]　小澤　雅[*4]

New compulsory English presentation course in Tokyo Polytechnic University
--- Active learning and mixed class presentation sessions---

Yuka Shigemitsu[*1] Miyuki Suzuki[*2] Hanae Hoshino[*3] Miyabi Ozawa[*4]

Abstract
This paper reports what we discovered as we started the new compulsory English of oral presentation course in Tokyo Polytechnic University in the academic year of 2015. Chapter 2 introduces a summary of the course. The course streams students into 15 classes plus one repeaters' class for students who failed the previous academic years. Teachers are allowed to use any teaching method for their students. All students must present their work in the class. The two of the teams can have a chance to give a presentation in joint classes' presentation. Chapter 3 introduces the activities that help students engage in the acquisition of presentation skills in English. Each activity gives some future pedagogical and research implication for activity design and effective teaching styles. Chapter 4 shows the result of a questionnaire to the teachers. We asked lecturers who had the presentation class in 2015 academic year to answer a questionnaire, in order to address future issues and problems. The result indicated that most lecturers had difficulty teaching how to write presentation drafts. Furthermore, depending on the level of classes, there seemed to be a huge difference in classroom activity as well as English ability. However, it could be said that presentation class motivated most students to study English. Chapter 5 explains the students' presentation and the reaction by the audience. By showing their comments on the evaluation sheets in different levels, the effect of the presentation class will be discussed. Final chapter discusses the limitations and refers to the future tasks.

1. はじめに

本研究では、2015 年度から東京工芸大学工学部で必修科目として導入された英語プレゼンテーション科目における、教員の教育力向上と学生の学力向上を視野に入れ、1）導入初年度の授業実践報告、2）今後の課題の抽出を行う。第 2 章では、重光が授業導入の経緯と授業構成、第 3 章では星野が、本授業の特徴であるアクティブ・ラーニングについての例として 3 組で行った授業を例として示す。第 4 章では、鈴木が各授業担当者の授業問題点について、第 5 章では小澤が合同プレゼンテーションの実施と、学生への指導の効果について論じる。最後の章で、導入の初年度を振り返り、問題点と今後の課題と授業への提言を行う。

2. 英語プレゼンテーション科目の概要

（重光由加）

2.1 カリキュラム改革

東京工芸大学は、2015 年から英語の授業にかかわる大きな改革が三つある。一つは、大学全体のカリキュラムの見直しである。それまでの、いわゆる一般教養と呼ばれる科目は、工学基礎・語学・人間科学・体育という分類で、基礎教養科目として存在した。新しい分類には、工学基礎と、コミュニケーション・スキル、社会のしくみ、心と身体という下位分類があり、英語はコミュニケーション・スキルの中に分類された。

二つ目の改革は、英語科目の再編成である。それ以前は科目名に若干の変更があったものの、筆者の知る限り、1 年次、2 年次にそれぞれリーディング中心の科目 2 コマ、ライティング中心の科目 2 コマが必修としておかれていた。直近の 2014 年までの英語必修科目は、1 年次のリーディング科目は、英語 I（前期）、英語 II（後期）、ライティング科目は英語 III（前期）、英語 IV（後期）、2 年次の必修のリーディングは英語 V（前期）、英語 IV（後期）、ライティングの必修は英語 VII（前期）、英語 VIII（後期）があり、いずれも一単位の演習科目である。2015 年からは、1 年次の必修はそれ以前と同様リーディングとライティングがおかれたが、2 年生からは発展的な内容となるよ

[*1] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター 教授　[*2] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター 非常勤講師
[*3] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター 非常勤講師　[*4] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター 非常勤講師
2016 年 9 月 27 日 受理

う工業英語と英語プレゼンテーションの科目を置くこととなった。科目名は、授業内容の判別をしやすくするため、1年次の必修は英語リーディング基礎 I（前期）、英語リーディング基礎 II（後期）、2 年次の必修のプレゼンテーションの科目はアカデミック・イングリッシュという名称となり、アカデミック・イングリッシュ I（前期）、アカデミック・イングリッシュ II（後期）でそれぞれ各 1 単位、他に、工業英語 I（前期）・工業英語 II（後期）それぞれ各 1 単位の演習科目である（2015 年度はカリキュラム移行期のため、アカデミック・イングリッシュ I は英語 VII、アカデミック・イングリッシュ II は英語 VIII という名称で行われた。また、工業英語は 2014 年度から前倒しで行われた）。

三つ目の改革は、時間割とクラス編成である。時間割については、学部の基礎・教育の範疇にある重点科目（工学基礎、コミュニケーション・スキル、社会のしくみ、心と身体のうちの体育、キャリア）はユニット科目と呼ばれ、同じ時間帯におかれることとなった（表 1、表 2）。2 年次のユニット科目は英語とキャリア系の科目である。

表１　１年次ユニット科目
（木１限は一部のユニットのみ）

	月	火	水	木	金	土
1	■			■	■	
2	■				■	
3			■	■		
4			■	■		

表２　２年次ユニット科目

	月	火	水	木	金	土
1			■			
2				■		
3	■					
4						

それぞれのコマの中で、ユニット科目が重ならないように配置がなされ、学生は指定されたユニットクラスに所属し履修することとなる。

クラス編成は学科の枠をはずし、入学直後に行われる基礎調査テストの結果の成績順でクラス分けを行われる。基礎調査テストの科目は、数学・理科（物理・化学）、語学（国語・英語）で、数学の成績を基準に、物理・化学のどちらを選択するか（学科によって異なる）を加味して工学部学生を 16 等分した。入学時の人数にもよるが、一クラス 25 人から 30 人程度である。2 年生は、英語だけがユニット科目なので、入学の英語の成績で分類し、アカデミック・イングリッシュは 15 クラスと再履修クラス、工業英語は 12 クラスの編成である（注 1）。アカデミック・イングリッシュは他大学に較べ人数が多いが、一クラス 25 人から 30 人程度、工業英語は、35 人から 40 人である（クラス編成の違いについては 2.2 を参照のこと）。成績最上位クラスは英語の正答率が 80%であるのに対し、最下位クラスは 25%ほどで大きな開きがある。出題のうち 60%は、中学の指導範囲から出題されていることを考慮すると、最下位クラスは中学レベルの英語も習得していないことになる。

2.2 プレゼンテーション科目導入の準備

実際に 2.1 で示したカリキュラム改革は、担当教員からではなく、執行部側から提案されたものである。英語プレゼンテーションを扱う科目は、それ以前は選択科目も含めて存在しなかったので、学生の能力、教員の指導のスキルの両面から検討が行われた。また、以前、試験的に一部の学科で、能力別に 3 等分して行った授業は、学生の学習意欲を減少させる結果に終わったので、クラス分けについても慎重に検討された。

プレゼンテーションを導入するための英語能力が備わっているか、英語能力が低い学生に対してはどのように指導するかも課題である。東京工芸大学の学生の英語力は必ずしも高くなく、希望者のみが受験した全学向け TOEIC IP テストの平均点は 313 点（2014 年度前期、n=53）、305 点（2014 年度後期、n=50）、306 点（2015 年度、n=114）であった。プレゼンテーションをするためには、準備段階としての資料の読み込み、正しい文法とプレゼンテーションにふさわしい談話構成力、オーラルプレゼンテーションにふさわしい独話力が必要であるため、どのように授業を運営するか、複数のクラスの授業内容をどのように統一するか、または、統一しないか、英語力の高くないクラスも、プレゼンテーションができるのか、課題が多い。

プレゼンテーションの授業内容に関しては、2014 年の大学英語教育学会から、いくつかの研究発表を参考にした関戸・安間(2014) による「グループプレゼンテーション大会の実践 —その目的、効果、今後への展望」では、獨協大学のスピーキング授業で行っているプレゼンテーション大会の成果を論じたものである。グループプレゼンテーションを行い、優劣を競う大会を実施しているが、学生に発表の評価をさせ、能力グループごと評価得点の違いや、グループごとの意識の違いを述べている。

また、橘野（2014）は『上級英語 III』という選択科目「芸術専攻学生の英語プレゼンテーション力の養成」で、授業の構成、学内発表会、JASET SIG「オーラルコミュニケーション研究会」での発表会についての発表会についての実践報告が行った（注 2）。

以上の研究発表や、他の発表（岩田他）をみると、実際に成果をあげている大学は、一クラスが 8 人くらいから多くて 24 人程度であることが明らかになったため、プレゼンテーション授業導入には、プレゼンテーション用のクラスの人数が 20 人台になるように、クラス編成を大学執行部に依頼した（注 3）。

これらの発表や市販のプレゼンテーションのテキストを検討し、以下のように申し合わせを行った。

・アカデミック・イングリッシュ I（前期）

クラスによる英語力の開きが著しいため、統一シラバスはあるが、授業レベルをそろえるのは困難である。そのため、クラスの能力にあった方法で行う。特に前期の科目は、たとえば、プレゼンテーションの原稿作成の準備段階とした英作文を重視する科目でもよいし、英作文以前の基礎文法を手厚く指導することでも、ミニ・プレゼンテーションを行うのでもよい。各クラスの学生の力が伸びる最適の方法を各教員が工夫する。なお、ローテーションで、CALL 教室が使用できる。

・アカデミック・イングリッシュ II（後期）

同じ時間帯のクラス同士で、第 12 回目の授業で合同プレゼンテーション発表会を行う。合同発表会では、全員が発表する時間的余裕はないので、各クラスから 2 組代表を選ぶ。クラス代表の選び方は各先生の自由裁量とする（担当者からの指名、自薦、事前発表会での投票等）。そのため、後期は合同発表会を最終目標とし、授業構成は各クラスで検討する。なお、ローテーションで CALL 教室を使用する。発表原稿の長さは、1 組 5 分以内。発表は単独でもグループでもどちらでもよい。グループの人数は、2～4 人、または一人での単独発表でもよい。発表時はパワーポイントの使用ができる。使用しなくてもよい。

このように、導入初年度であり、教員側も経験者が多くないことから、指導法にある程度の重度を持たせた。そのかわり、授業期間の連絡や教員同士の情報交換はできるだけ密に行った。続く章で、授業内容、発表会の成果、学生や担当者からのフィードバックを示す。

（注 1）　工業英語の再履修者は、各自都合のよいクラスで履修する。

（注 2）　橘野氏は、同じ東京工芸大学の芸術学部についての発表であるが、英語教員はそれぞれの学部に分属し、共通の科目等はない。

（注 3）　再履修クラスは、半期で完結するが、後期のクラスは正規の履修者クラスと合同の発表会に参加する。

3. 指導方法について

（星野芳恵）

3.1 はじめに

この章ではプレゼンテーションの指導方法について第 3 組での取り組みを一例として紹介する。前章で述べたようにアカデミック・イングリッシュのクラスは能力別試験によってレベル分けされており、指導方法も各教員の裁量に任されていた。しかしながら、各クラスでの学習者の到達目標は合同プレゼンテーションで使用された評価表の項目（Appendix 1）が反映されたものである。

3.2 合同プレゼンテーション評価項目

評価項目とは学習到達目標であると同時にクラス運営に際しての指導指針となるものである。今回評価項目として 1) content　この場合、観衆である学生にとって理解できる内容であったか 2) eye contact 3)　posture 4) gestures 5) volume of voice 6) rate of speech　が採用された。第 3 組では上記の項目をアクティブ・ラーニングの形式を主体に主にグループで課題に取り組んでもらった。以下に実際に学生に取り組んでもらった各評価項目に関連するアクティビティの概要を紹介する。

3.3 アクティブ・ラーニングとは

まず、前述したアクティブ・ラーニングとは先行研究において学習に付随する状況が多種多様であることから一定義で示されることは難しかった。しかしその根底にある共通認識は *any instructional method that engages students in the learning process* (Prince, 2004)という概念である。日本語を母国語とした学習者に英語のみならず、プレゼンテーション能力を身に着けてもらうためには、先行研究の直接的な採用だけでなく現場での試行錯誤や応用が不可欠である。本報告では可能な限り学生が主体となるアクティビティを採用し、学生が学習し、実際に技能を習得できることを授業運営の目標として設定した。また、各項目の技能は一授業で学習が完結するものではなく、授業計画として授業毎に繰り返しアクティビティに取り入れられた。

3.4 何故プレゼンテーションをするのか

前期の第 1 回目の授業ではガイダンス後に履修者のプレゼンテーションの経験について確認した。履修者全員が英語でのプレゼンテーションを行った経験がなかっただけでなく、日本語でのプレゼンテーションも行ったことがない学生が大多数を占めた。そこでプレゼンテーションの授業にあたり、何のためにプレゼンテーションを行うのか具体的な状況を想像しながらグループでの話し合いを行い、クラスで意見を共有してもらった。履修者数は 26 名、4 つの 5 人のグループ、1 つの 6 人のグループを作ってもらい意見を出してもらった。学生からの解答例としては社会人になった設定で仕事場での状況を想定し、「新製品、商品を消費者に買ってもらうため」、「商品の企画やイベントの提案をするため」などの意見が出た。また、学生自身の専門科目に関するクラス内でのプレゼンテーションを想定した解答もあった。プレゼンテーションを行うことがいかに日常的であり、聴衆の関心を引きつけるものである必要があるかを学生自身で確認する機会をもつことで当科目学習への積極的な取り組みへの動機となった。なお、学生の話し合いは日本語で行われ、学生の意見を共有する際は教員側が学生の意見を英語で言い換え板書する方法をとった。

3.5 プレゼンテーションにおいて大切なこと

第 2 回目の授業では評価表の項目がいかによいプレゼンテーションに不可欠かを考えてもらうためのアクティビティに取り組んでもらった。3 分ほどのスティーブ・ジョブズのプレゼンテーショの動画を観てもらい、彼のプレゼンテーションをグループで理由も述べながら評価をしてもらった。動画は字幕なしで学生の要望に基づき、3 回観てもらい、話し合ってもらった。 各グループからは「話す速さがちょうどいいので聞き取り易い」、「観客をきちんと見て話しているので自信があるようにみえる」、「パワーポイントのスライドがシンプルで見やすい」、「手の動きがうまく話のポイントが分かりやすい」等、パフォーマンスに注目した意見が多く共有された。スティーブ・ジョブズ氏を知らない学生はおらず、また彼のプレゼンテーションが優れていることを知っていた学生も多くいた。このアクティビティを通してプレゼンテーションで重要な技術やポイントを全体で確認でき、各技術の学習に入る前の布石となった。また、第 3 組の前期の授業では後期の 12 回目の合同プレゼンテーションに向けて、第 6 回目の授業で短いプレゼンテーションをすることを授業計画とした。そのため、第 2 回目の授業では英語での自己紹介をテーマとしたプレゼンテーションの概要を説明し、150 単語ほどの長さの原稿の作成についても説明した。原稿内容の焦点は自身の略歴を述べる以外は自由とした。結果として自分の家族、趣味、サークル活動、地元の紹介などに焦点をあてた原稿が多くみられた。原稿の作成に際しては、教員側で雛型を 5 パターン用意し、学生が伝えたい内容と似通った部分があれば雛型にある表現法を参考にするよう指導した。当クラスでは 5 学科の異なる学生が履修し、お互い友人同士でない学生も多かった。そのため、原稿を作成する前にグループ内で実際に自己紹介をし合い、150 単語で伝えるべきポイントが何かを確認し合ってもらった。第 5 回目の授業では第 6 回目のプレゼンテーションのリハーサル練習をする計画となっていたため、原稿作成からリハーサルまで 3 週間書き直しの機会が与えられた。この期間設定は当大学での 1 年生必修の Writing 基礎のクラスでの指導経験を基にしている。多くの学生にとって 150 単語程の長さのエッセイ作成を授業内で形になるものとして完結させることは難しい。本学の学生においては修正も含め数回の授業回数内で取り組ませることが、最終的な学びに繋がることが筆記試験の成績からも伺えた。よってリハーサルまでに学生の必要に応じて教員側も原稿の添削ができるようにした。また、第 3 組では完成させた原稿はすべて暗記させ、プレゼンテーション実施の際は原稿の持ち込みが出来ないことを規則とした。その理由として、プレゼンテーションの際に原稿を持ち込んだ場合、視線が原稿に向けられ、聴衆との eye contact が疎かになること、gestures の使用の妨げになること、何より自分の伝えたいことを原稿に頼らず発表することが、発表者の自信や聴衆への説得力のあるパフォーマンスへと繋がるためである。また学生の取り組みの遅れは全体のグループ活動の参加に支障がでる。よって原稿作成には修正、暗記、学生の取り組みへのフィードバックに十分な時間が取れる授業計画にした。

3.6 Posture と Eye Contact

第 3 回目の授業では英語圏において正しい posture と eye contact の使用法についてアクティビティを行ってもらった。第 3 組では Speaking of Speech New Edition を教科書として使用した。当教材は異なるタイプのプレゼンテーションや各技術に対して、学生版の教科書にもパフォーマンス映像の DVD が英語の字幕付きで付属されており、特にプレゼンテーション未経験の学習者にとって使用しやすいものとなった。posture、正しい立ち方の学習については間違った posture の特徴に注目しそれに合ったネーミングを付けるアクティビティ(p.10-11)の後、実際にグループメンバーを聴衆と想定し、学生が一人ずつ posture をとり、正しく行われているかメンバーが確認するアクティブティを行った。教員は各グループを回りグループ内での取り組みが適切に行われているかを確認した。Eye contact においても教科書のアクティビティ(p.13-14)を採用し、各学習者が正しい posture をしながら、各グループメンバーと 3 秒ずつ目を合わせ、目が合ったグループメンバーは手をあげ、視線が合わなくなったら下ろさせ、少なくともグループメンバー全員の手が一度は上がるように練習させた。その後グループごとに、教壇側の位置に一人ずつ立ち、視線を前後左右の聴衆にも万遍なく、つまり他のグループのクラスメイトそれぞれと目を合わせるようにし、目が合った学生には手を挙げてもらった。
posture、eye contact の練習の後は、第 2 回目の授業から取り組んでもらっている自己紹介文の原稿をグループで共有してもらい、内容、可能であれば英語の使い方にもフィードバックをし合ってもらった。教員側は各グループを回り、学習者の進捗状況を把握し共通の問題点などに留意した。問題点の一例を挙げると、学習者の中には「～人家族である」と伝えたいときに、'There are three people in my family' の代わりに'I have three families.'と誤った使い方をしていた。何故使用法が誤っているのか全体で確認をし、雛型として配布した英作文をモデルにどう自分なりの表現を組み立てるか、学習者の理解度に合わせて説明した。

第 4 回目では gestures の使用法をグループで確認させた。まず、付属の DVD を使用し、informative presentation いわゆる観衆に情報を与えるプレゼンテーションを観せ、gestures のみに注目してもらった。どのような英語表現を口にしているときにどのような gestures を使用したかグループでまとめてもらい、全体で確認した。その後、教科書のアクティビティ (p.8) のリストアップされた英語表現を学習者オリジナルの gestures を使いグループメンバー同士でどの英語表現を表しているのか推測しあった。パントマイムが上手な学生などが、特に盛り上げ役になり和気あいあいとしていた。次に実際に 4 種類の gestures (p. 18) を全体で確認した後、グループ内で、実際に例文を

口にしながら、gestures を使用してもらった。教科書にある例文(p.19-21)を覚えられず教科書に目を落としながら行う学生が多かったため、今迄学習した posture、eye contact も行いながら、gestures を使用するようコメントをした。口にしている英文と gestures を行うときのタイミングにずれが出ることも多く学生も熱心に練習をしていた。最後に長めのパラグラフ構成された各文(p. 24)に関して gestures を適切に使用し、グループ内で確認してもらった。ここでも正しい posture、適切な eye contact、英文を口にしながら gestures を適切に行うことは何回かの練習が必要であった。最後に自己紹介のプレゼンテーションをする際にはどのような gestures が適切で聴衆の理解に役立つのに効果的か個人で考えてもらい、その後グループで意見交換をしてもらった。

3.7 Voice Inflection

第 5 回目では voice inflection いわゆる声の出し方、抑揚についてアクティビティをしてもらった。付属の CD をかけ、声の使い方に注目して意見を出し合ってもらった。その後強勢のおきかた、発音の伸ばし方、間のとり方などを全体の聞き取り易さを確認しながら、全体で練習してもらった(p.28-31)。次にグループ内で分担し中国とナウルに関する英文を posture、eye contact、gestures、声の抑揚に注意しながら練習してもらった(p.32-35)。 最後に自己紹介文でこれらの声の抑揚をどう効果的に使えるかまず個人で考え、グループで協力し、意見を出し合い第 6 回目のプレゼンテーションに向けて取り組んでもらった。6 回目で使用される評価表は合同プレゼンテーションで使用されたものと項目が重複するが、他に memorization を加えた点数方式にし、良かった点、改善点においてすべての学生にコメントしてもらい、プレゼンターに評価表を渡すことを説明した(Appendix 2)。また visuals の使用に関しては希望者のみにし、パワーポイントなどではなく、A3 版の用紙に後ろに座った聴衆が見える大きさのイラスト、または写真が使用できることにした。パワーポイントなどの効果的な作成に関しては授業内で十分に取り組む機会が必要だったためである。

第 6 回目のプレゼンテーションはどの学習者もよく準備できており、暗記することを規則としたため、学んだ技術を意識したものとなった。発表者 25 人の平均点が 25 点満点で 22 点となり、内容の十分な暗記がなされなかったため、eye contact、gestures のパフォーマンスに影響することが実際に感じられた発表者もいた。なお、それぞれの発表者に対し、すべての聞き手が記名式で記入する形にした評価表は各々の発表者に渡され、発表者は教員からだけではなく、すべての聞き手からの評価を点数、コメントで確認することができた。

3.8 合同プレゼンテーションに向けた取り組み

以上第 6 回までの指導方法の概要を記したが、自己紹介のプレゼンテーション以降、学習者がプレゼンテーションの流れをかなり理解した感があった。

第 7 回目からは第 6 回目のプレゼンテーションのフィードバックを行い、自分のパフォーマンスを振り返ってもらった。その後、合同プレゼンテーションに向けて 250 単語ほどの長さで構成された様々なタイプのプレゼンテーションに触れてもらった。例を挙げると前述した、informative speech に加えて layout speech や demonstration speech を観てもらい、パフォーマンスの特性や違いに注目してもらった。

そして 8 回目以降は visuals の正しい作成の仕方を考えるアクティビティに取り組んでもらった。まず、visuals の役割とよい visuals がプレゼンテーションによって大切であるかを考えてもらった。その後付属の DVD で visuals において改善の必要のあるプレゼンテーションを観てもらい、問題点を書き出し、改善のためにどうすればよいか個人で取り組んでもらった後、グループで意見を交換しあってもらった。その後、適切な visuals を使用したプレゼンテーションを観てもらい自分たちの話し合った内容と比べてもらった。また、データをグラフで示す場合のグラフの種類、写真、イラスト、図、ダイアグラムの使い方、チャートの種類を全体で確認し、自分が伝えたい情報をどの visuals で示すべきか考えてもらった。また、文章で埋め尽くされたもの、聴衆にとって見づらい配色、大きさ、主旨を不明瞭にさせる不必要な情報を含んだスライドを使用しないよう実際の例を観ながら確認していった。

9 回目、10 回目、11 回目では visuals の作成の練習をするために二つの場所（国や都市）に関する情報をリサーチしてもらいそれぞれの情報に関して、どのタイプの visuals が使用できるか考えながら作成してもらった（p.49-50）。作成するスライドは 5 枚に限定し、パワーポイントのスライドづくりにはリサーチの時間も含め 2 回分のクラスは必要であり、クラス外の時間も使用してもらった。また、同時に作成してもらった 5 枚のスライドを使用し、チャートを説明する際に使える表現を実際にグループで確認しあってもらった。また、グループメンバー同士で作成してもらったスライドにフィードバックしあい、適切に使用されているか確認してもらった。教員は各グループを回り、各学習者のスライドを確認し、コメント、フィードバックをした。チャートの説明をどう適切に説明するか、定型表現の練習だけでなく、容易に理解できることを妨げるグラフが使用されていないか、説明が適切かも重点をおいて練習してもらった。12 回目ではグループ内でのスライド発表に取り組んでもらったが、データを説明する際に使われる英語は定型として英語としては理解しやすいようだったが、発音や voice inflection などに課題がでた。

後期は 1 回目から合同プレゼンテーションに向けての準備を始めてもらった。第 3 組では付属の DVD にある様々なプレゼンテーションのタイプを視聴し前期での取り組みを思い出してもらうと同時に、特にパワーポイントを使用したスライド作成に注意しなければいけない点に

注目してもらい、クラスで意見を共有してもらった。合同プレゼンテーションで発表してもらう内容に関しては、「休暇時に訪れるのにお勧めの場所」とした。学習者は前期後半で取り組んでもらった二つの場所（国もしくは都市）のリサーチの過程で特に自分が興味を持った情報をそれぞれ持っており、学科の違いに関わらず受け入れやすいテーマであったためである。最初の授業でまず、原稿作成にあたって 250 単語ほどの長さの原稿の例を学生に配付した。原稿は教科教材の informative speech からおこしたものである(Appendix 3)。その際、構成が一目で分かるようにした。学習者は授業内の半分ほどは原稿もしくはスライド作りに取り組んでもらい、各回 introduction、body、conclusion の構成要素、使われる英語の表現を確認した（p.57-94）。スライド作り、原稿作りには 5 回分の授業時間を要した。学習者の多くはその国、都市に行った経験はないもののその場所を薦めたいという者が多かった。よって、資料集めに時間がかかった。そして資料集めの際も日本語で検索し、知りたい情報を英語で検索したりする学習者が多く、逆に日本国内の都市を紹介したい学習者は日本語のみでしか検索されない情報を英訳する作業を中心に進めた。また、一度作成したスライドでも全体の伝えたい内容に合わない場合は作り直しをした。作成の際は、グループメンバー同士で話し合ったり、作成したりしたものをどう思うかなど意見交換をして作業している学生が目立った。また、教員側は各学習者のもとを回り進捗状況を確認したり、英語表現で分からないところ等があれば質問に答えたり、助言したりした。スライドを作成しながらメモの欄に英語でどう説明すべきか配布した原稿の雛型をお手本に取り組んでいる学習者がほとんどであった。第 12 回目の合同プレゼンテーションに向けて第 9 回目はリハーサル、第 10 回、第 11 回はクラス内でのプレゼンテーションを行った。評価表には visuals の見やすさ、visuals の説明を採点する項目を加えた(Appendix 4)。また、クラス内でのプレゼンテーションでは投票で合同プレゼンテーションで発表する 2 名を決めてもらった。選ばれた 2 名は評価表の項目をすべて満たし、大変よいプレゼンテーションを行った（Appendix 5）。

3.9 指導成果と今後の指導課題

1 年目の試みということもあり、各クラスの履修者によりどう授業が運営されるかが考慮すべき点であったが、第 3 組ではグループを主体とした取り組みを通して合同プレゼンテーションの評価表の項目を練習した結果、学生にとって今後実際にプレゼンテーションをする機会に向けたよい練習となり、今後の授業の運営の仕方など将来的なよりよい授業への指針となった。また、後期の合同プレゼンテーションのあとに個別に 16 項目で授業アンケートを行った(Appendix 6)。回答者数 22 名で「今後のプレゼンテーションをする上で自信がついた」に対する回答はとてもそう思う　9 名、そう思う 10 名　また「将来的な発表の機会をイメージできた」　とてもそう思う 7 名、 そう思う 11 名 と学生自身にも満足度の高い内容となった。今後の課題としてはクラスによってはグループ活動を好まない履修者が多い、加えて 250 単語ほどの原稿自体をプレゼンテーションの授業をするまで取り組んだことがなく、原稿作成に多大な時間を要するなど発表するためのライティング能力を全体でどう上げていくか考えていかなくてはならない。また、今回テーマを統一してプレゼンテーションをしてもらったが、将来的に学習者自身の専門分野に関して英語のプレゼンテーションをする場合、専門科目と英語科目との連携も必要になってくるのではないかと思う。結果的に、指導する側としては英語でのプレゼンテーションを行ったことがない学習者が英語圏での適切なプレゼンテーションの仕方を行ってくれたことは大きな成果として評価したい。何より学習者の好意的な評価を考えれば、今後の学習者のさらなる学習への動機となるであろう。

4 教員からみた授業の問題点・今後の課題

（鈴木幸）

4.1 はじめに

次に、初年度のプレゼンテーション科目を終えたところで生じた、授業の進め方の相違点、教員が抱えた課題、反省点について、書面アンケートをもとに報告する。工学部 2 年生は能力別試験で、1 クラス 25 人程度の、15 クラスに分けられている。そこに再履修クラス 1 クラスを追加した計 16 クラスがプレゼンテーション対象科目となる。そこで授業を担当した教員にアンケートを依頼し、初年度に各教員が授業を進める上で工夫した点、苦労した点、生じた問題点等を回答してもらった。これらを把握、考察し、今後の授業運営における意義、課題を明らかにしていきたい。

4.2 アンケート結果

アンケートは、2015 年度に新設されたプレゼンテーション科目を担当した 16 名の教員中 11 名にご協力いただけた。2016 年 4 月に回答を依頼し、14 個の選択項目に匿名で答えてもらった。各回答には「その他」として記述欄が含まれる。また、複数回答も可能とした。以下、設問順に報告する。

4.2.1 担当クラス

回答いただけた教員は、上位 5 クラスから 4 名、中位 5 クラスから 3 名、再履修クラスを含む下位 6 クラスから 4 名の、計 11 名だった。

4.2.2 授業を進めるうえで工夫された点

表 1　工夫した点　n=11

項目	人数	パーセント(%)
Writing	9	81
文法・論理構成の指導	8	72
Speaking	5	45
Reading	1	9
Listening	0	0

「Writing」と「文法・論理構成の指導」といった「書く」指導を工夫したと答えた教員が 7 割以上だった。また、複数回答では「Writing」と「文法・論理構成の指導」の組み合わせが 5 名、「Writing」または「文法・論理構成の指導」と「Speaking」の組み合わせが 5 名だったことから、4 割強の教員が主に「書く」ことに、また別の 4 割強の教員が「書く」と「話す」の 2 作業に工夫したことが分かった。

4.2.3 授業を進めるうえで苦労した点は?

表 2　苦労した点　n=11

項目	人数	パーセント(%)
Writing	11	100
Speaking	3	27
その他	1	9
Reading	0	0
Listening	0	0

「Writing」に苦労したと答えた教員が 11 名で、満場一致だったことから、プレゼンテーションの原稿を「書く」ことを指導することがいかに大変なことかが分かる。また「その他」の意見として、学生を続けて出席させることに苦労したという回答を得た。

4.2.4 授業で用いた教材

表 3　教材　n=11

項目	人数	パーセント(%)
教科書	7	63
その他	4	36
教科書と DVD	3	27
教科書、DVD、CD	1	9

アンケートに協力した 11 名の回答は、「教科書」中心(6 割強)か、「教科書以外」(4 割弱)かに分かれた。授業方法は各教員にゆだねられたため、教科書もさまざまであった（注 1)。教科書以外を表わす「その他」では、You Tube の映像、Power Point マニュアル、独自のテキスト、アメリカの小学校教材の活用といった答えを得た。

4.2.5 発表練習の方法

表 4　練習方法　n=11

項目	人数	パーセント(%)
個人	9	81
個人・グループ・ペア	3	27
グループ	2	18
個人・グループ	1	9

「個人」練習をしたクラスが 9 名で多く、「個人・グループ・ペア」の中から学生に選ばせたという回答も 1 名あった。

4.2.6 発表原稿の添削で苦労した点は?

表 5　添削　n=11

項目	人数	パーセント(%)
文法	10	90
単語の選び方	7	63
パラグラフ構成	6	54
その他	3	27

この設問に関する回答はどの項目も 5 割以上であることから、「文法」を主として、教員が添削になにかしらの苦労をしたことが分かる。なお「その他」として、「締め切りの厳守」、「添削の難しさ」、「学生がパラグラフ概念を理解していない」という回答を得た。

4.2.7 合同発表会の代表者選択方法

表 6　代表者選択方法　n=11

項目	人数	パーセント(%)
多数決	8	72
先生による指名	2	18
その他	1	9
推薦	0	0

7 割強の教員が「多数決」で決めたと答えた（注 2)。

4.2.8 授業の成果

表 7　成果　n=11

項目	人数	パーセント(%)
発表に慣れた	10	90
英語力が伸びた	2	18
発音が良くなった	2	18

「発表に慣れた」と回答した教員が 10 名だった。「発表」のような、学習者の参加が促される学習方法は、従来の座学・受動的な学習には見られないことであり、アクティブ・

ラーニングの実践のためにも（注 3）、このプレゼンテーション科目の導入が効果的であったと考えられる。

4.2.9 成績の付け方

表 8　成績　n=11

項目	人数	パーセント(%)
プレゼンテーション	10	90
テスト	8	72
授業態度	7	63
その他	2	18

プレゼンテーション科目のため、9 割の教員が「プレゼンテーション」を基に成績を付けたと回答した。「その他」の他の意見は、「小テスト」や「毎回のドラフト提出」を含むといった記述だった。なお、複数回答の組み合わせをみると、「プレゼンテーション・テスト・授業態度」から総合で成績を付けた教員が 5 名だったが、その割合は教員により異なる（注 4）。

4.2.10 クラス内で学生に差が見られた項目

表 9　学生の差　n=11

項目	人数	パーセント(%)
発音	5	45
表現力	5	45
英語力	4	36
文章力	4	36
自信	3	27

この設問に関しては大きな差は見られなかったが、「その他」として、テーマから何をどのように書けばよいのかがわからない学生が多く、「発想力」に差が見られたという記述を得た。

また、「対処法」を聞いたところ、「練習時間を多くとる」、「ペアやグループを組ませてお互いに補い合う」、「アメリカの小学校教材が役立つ」という意見があった。

4.2.11 学生が特に興味を持って取り組んだと思われる点

表 10 学生の興味　n=11

項目	人数	パーセント(%)
プレゼンテーションの方法を学ぶこと	6	54
作文の Writing	6	54
人の発表を聞くこと	5	45
その他	3	27
Speaking	2	18

「その他」の「視覚資料の効果的な使用方法」、「自分の興味のあるトピックについて述べる」、「自分のテーマについて、情報をしぼり考える」といった意見も含め、プレゼンテーションについて学ぶことは、学生が主体的な学びに興味を持つための動機づけになると考えられる。

4.2.12 学生が特に苦労したと思われる点は?

表 11　学生が苦労した点　n=11

項目	人数	パーセント(%)
文法	8	72
人前での発表	7	63
発音	5	45
その他	2	18

「その他」の「文章を書くこと」、「文章構成」といった意見も含め、「書く」ことも「話す」ことも、学生が苦労したと感じた教員が 6 割以上いたことが分かった。

4.2.13 【本学で他の英語の授業を教えられている先生へ】普通の英語科目と比べて、学生の授業態度の違いは?

回答した 11 名中 7 名が他の授業と掛け持ちしていた。そのうち「あった」と答えた教員が 5 名、「なかった」と答えた教員が 2 名だった。また、「あった」と答えた教員に、「どのような違いがありましたか」と質問したところ、「各自が責任をもって発表にとりくむ」そして「自分の興味のあるトピックについて発表できる」ことから「座学の授業よりも積極的に受講した」、「最終的にプレゼンテーションで成果が現れる」そして「英語力以外のパフォーマンスも学べる」ことから「学生のモチベーション向上につながる」といった肯定的な意見があった。

4.2.14. 必要な改善点

自由回答で得た記述は、以下の四つに分けることができる。一つ目は、グループ発表では学生が作業を分担させる傾向があるため、各自責任をもってプレゼンテーションの準備から発表までを行なえるように「個人発表」にした方が良いのではないか。また、そのためにも成績の付け方も明確にするべきではないか。二つ目は、発音の個人指導や、発表後の振り返りのためにも、「クラスの人数」は 15 名から 20 名程が理想的ではないか。三つ目は、論理性のある文章を書くことができるように「作文の習性化」を促した方が良いのではないか。四つ目は、下級クラスになればなるほど、発表したいと思う内容と、学生自身の英語力との間に差があるため、「興味と英語力の開き」をどのように埋めれば良いのだろうか。

4.3 まとめ

アンケートの結果、教員がもっとも重点を置いた点は、プレゼンテーションの原稿を作るという作業であり、「工夫した点」、「苦労した点」共に、「Writing」そして「文法」や「論理構成」、「単語の選び方」といった「書く」作業につながる回答だった。とはいえ、同じ「書く」作業でも、クラスのレベルによって、文章を書くこと自体に苦手意識を持つ学生や、テーマが決まっても情報を絞ることが苦手な学生、また、興味のあるテーマと自分の英語力とに大きな差がある学生が、下位クラスにより見られたようである。

また、「書く」ことに加えて、「練習時間の多さ」や「表現力」、「原稿以外の視覚資料の作成」といった多様な指導により重視できたクラスは、下位クラスよりも上位クラスのようであった。要するに、原稿作りで精一杯の下位クラスに比べて、上位クラスの方が、より質の高いプレゼンテーションを目標に掲げることができ、その目標を達成するための指導ができたといえるだろう。

しかし、プレゼンテーションという最終的な結果が出ること、学生が従来の座学の科目よりも自分の興味のあるテーマを学べるだろうことからも、本科目は、レベルに関係なく多くの学生が能動的に英語を学習できる機会となったと考えられる。どのクラスにおいても「原稿作成の指導」が一番の課題であることが今回のアンケートから分かったが、学生が興味を失うことのないように、そして学生が何に興味を示しているのかを見極めたうえで、学生の英語力・プレゼンテーション能力を活かし、伸ばせるよう、教員は授業を進めていく必要があると考えられる。

（注１）使用された教科書は以下の通り。(上)は上位クラス、(中)は中位クラス、(下)は下位クラスを表わす。
・Harrington, D & LeBeau, C, *Speaking of Speech, Macmillan*, 2008. (上)
・杉田由仁、*Writing for Presentation in English*、南雲堂、2013 年。(上)
・Gershon, S, *Present Yourself 2*, CUP, 2015. (上)
・杉橋朝子(他)、*Effective Presentation Skills for Beginners*、朝日出版社、2015 年。(上) (下)
・Kudo, T, *My First Trip*, Cengage Learning, 2014. (中)
・仲谷都(他)、*Speaking in Public*、成美堂、2009 年。(中)
・松岡昇(他)、*Presentation To Go*、センゲージラーニング、2014 年。(中)
・竹中肇子、*Prepare Your Speech*、南雲堂フェニックス、2008 年。(下)
（注２） 「その他」の１クラスは、「全員参加」だった。
（注３）中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」2012 年 8 月 28 日、p. 9。アクティブ・ラーニングの授業には「ディスカッションやディベートといった双方的の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業」が求められる。
（注４）「その他」によると、「プレゼンの評価を割合の半分程度」という教員も、「全体の 30%」という教員もいた。

5. 合同プレゼンテーション

（小澤雅）

5.1. 合同プレゼンテーションの実施

後期 12 回目の授業で、同じ時間帯のクラスが合同で発表を行った。月曜日は 1~5 組の上位クラス、水曜日は 6~10 組の中位クラス、そして木曜日は 11~15 組の下位クラスに加え、再履修クラスの 16 組である。各曜日の発表会では、各クラス 2 組の代表が 7 分以内で発表を行い、100 名以上の聴衆の学生は、評価用紙に必要項目を記入する課題が与えられた。

5.2. 発表テーマと発表形式

発表テーマと発表形式は自由であったため、それぞれに個性が見られた。以下の表 1~3 は、上位・中位・下位クラスのそれぞれの発表者の発表テーマ・人数・視覚資料等の使用について示したものである。

表 1 発表テーマ・人数・視覚資料等（上位クラス）

発表順	発表テーマ	人数	視覚資料等
1	ビートルズとレッドツェッペリンの魅力	2	PPT（注１）
2	お気に入りのバスケットボールプレイヤー：Stephen Curry	1	PPT
3	京都の魅力	4	PPT
4	尊敬する人物：王貞治	1	写真・音楽
5	映画やアニメーションの歴史	3	PPT
6	パリの魅力	1	PPT
7	ロンドンの魅力	1	PPT
8	広島の魅力	1	PPT
9	尊敬する人物：三浦知良	1	PPT
10	世界の料理文化（和食、中華、トルコ料理、フランス料理）	3	PPT

表 2 発表テーマ・人数・視覚資料等（中位クラス）

発表順	発表テーマ	人数	視覚資料等
1	「ミニマリスト」	1	なし
2	熊	4	PPT
3	3D アート	1	PPT
4	アーチェリー	1	PPT
5	東京工芸大学	4	PPT
6	日本の英語教育	3	PPT
7	諏訪神社	1	PPT
8	未成年者飲酒	3	PPT
9	日本の政治	3	ﾎﾟｽﾀｰ

表 3 発表テーマ・人数・視覚資料等（下位・再履修クラス）

発表順	発表テーマ	人数	視覚資料等
1	携帯電話のアプリ	8	PPT
2	東京工芸大学	7	PPT
3	サッカー	2	PPT
4	日本の地震	1	PPT
5	台湾	1	PPT

6	エンジニアの利点と欠点	1	PPT
7	絶滅危惧種	2	ﾎﾟｽﾀｰ
8	鶏、豚、牛	3	PPT
9	夢	2	PPT
10	“Ken’s Café Tokyo”	1	PPT
11	魚	1	PPT
12	建築	1	ﾎﾟｽﾀｰ

5.3. 評価用紙のコメント欄

次に、聴衆の学生が評価用紙のコメント欄に記載した感想を紹介する。集計協力クラス・人数は、計 11 クラス・176 名である。内訳は、上位クラスは 1,2,3,4,5 組の計 86 名、中位クラスは 6,8 組の計 35 名、下位・再履修クラスは 11,12,16 組の 55 名である。コメント欄には様々なコメントが記載されていた。本稿では、発表の良かった点、改善点・課題の提案、そして今後の英語学習へのモチベーション向上に関するものを紹介する。

5.3.1.良かった点の提示

感想の中では、発表者の発表に関する肯定的な意見が多かった。評価項目に沿った具体的な意見から全体的なものまで、様々な感想があった。下記の表 4 は、上位（上）・中位（中）・下位（下）クラスでどのような意見があったかを、項目と内容ごとに分けて提示したものである。

表 4　良かった点の提示（上位・中位・下位クラス）

項目	内容	上	中	下
内容	面白い	○	○	○
	様々なテーマ	○	○	○
	まとまっている	○	○	○
	内容が濃い	○		
文の構造	しっかりしている	○	○	
	理解しやすい	○		
声	発音がいい	○	○	
	声が大きい	○	○	
	強弱がついている			○
	スピードが丁度いい	○		
身体の動き等	アイコンタクトが取れている	○		○
	ジェスチャーをしている	○	○	○
視覚資料	PPT の活用が上手	○	○	○
	内容理解に役立つ	○	○	○
全体	高いレベルの発表だった	○	○	○
	伝えたい情熱を感じた	○		○
	個性が見られた	○	○	○

表 4 で示されたように、上位クラスでは下位・中位クラスに比べ、より多くの評価項目に沿ったコメントが見られた。またレベルによる差が特に見られたのは、下位クラスで文の構造や内容の濃さに関してコメントがなかったことである。このような差が現れた原因は、各発表会での発表者の発表レベルだけでなく、聴衆が関心を持った、または意識することができた項目の差や、観衆の聴き取り能力の差が考えられる。

5.3.2. 改善点・課題の提案

感想の中では上記のような良かった点の提示が最も多かったが、改善点や課題を提案しているものも複数あった。ここでは、そのようなコメントの中でも特に多かったものを人数と共に提示する。

表 5　改善点や課題の提案（上位・中位・下位クラス）

項目	内容	上（人）	中（人）	下（人）
声	発音が綺麗な人が少ない	1	3	0
	声が小さい・滑舌が悪い	0	0	2
身体の動き等	下を向いて発表、紙を見て発表	6	3	0
	全体的にジェスチャーがない、不十分	4	0	0
視覚資料	PPT が文章ばかり/絵がないものだと分かり辛い、内容がよく分からない	0	0	6
	PPT を使わない発表は聴き取り辛い、分かり辛い	1	1	0

表 5 が示すように、上位クラスで最も多かった改善点や課題の提案は、身体の動きに関するものであった。一方下位クラスでは、視覚資料を有効的に使えていないと、内容がよく分からなかったという意見が多かった。5.3.1.の表 4 で、文の構造や内容の濃さに関してコメントがなかったことと比較すると、下位クラスでは口頭の説明だけでは発表内容の理解が難しかったということが示唆された。

5.3.3. 今後の英語学習へのモチベーション向上に関するコメント

一部のコメントでは、合同発表会で発表を聞いたことが、今後の英語学習へのモチベーション向上に繋がったということが示されていた。上位クラスでは、具体的な評価項目を明記しどこを自分は気を付けたいかという点が書かれているコメントが複数あった一方、下位クラスでは、発表全体を評価し自分自身の今後の発表に活かしたいという抽象度の高いコメントがほとんどであった。下記はコメ

ントの抜粋である。なお、括弧内に示された上・中・下は、それぞれ上位・中位・下位クラスからのコメントということを示す。

・「発音がよかったりジェスチャーを使ったりできている人が多かったので、自分もがんばりたいと思いました。」（上）
・「自分ではジェスチャーや暗記をして言うなどあまり得意ではないのと思うので参考になった。クラスでの発表はあまり紙を見ずにアイコンタクトとスピードに気をつけていきたいと思った。」（上）
・「（前を向いて話すことが皆の課題だと思ったが）自分もできないので気を付けなければ。」（中）
・「パワポ（注２）をつかっている人など発表のいい参考になった。」（中）
・「リスニング能力をもっとつけて、理解度を深めたいと思った。」（下）
・「各クラスの代表なだけあって皆発表の仕方が上手だった・参考にしていきたい。」（下）

5.3.4. まとめ

コメント欄の記述にはレベルによる差が現れたが、良かった点、改善点・課題の提案、そして今後の英語学習へのモチベーション向上に関するコメントのすべてに共通して言えることは、上位クラスではより多くの評価項目に沿った具体的な意見が多かった一方で、下位クラスでは抽象度の高いコメントが多いという傾向である。これは、発表のレベルだけでなく、発表を聴く側の意識の違いが露わになった結果と捉えられる。

（注１）「パワーポイント（Power Point）」の省略である。
（注２）「パワーポイント」の省略であるが、学生のコメントをそのまま載せている。

6　まとめと今後の課題

本稿では、東京工芸大学でのはじめての全学的な能力別クラス構成による、英語プレゼンテーション科目導入について解説し、1例として、3組（上位グループ）の授業、各担当者の指導の様子、本授業の目玉であるアクティブ・ラーニングと合同プレゼンテーションについて解説し、それぞれの項目での課題を論じた。

アクティブ・ラーニングの一例として、上位グループに位置する第3組の授業を紹介したが、クラス間の履修学生の能力に差があるため、第3組のように上位クラスの能力をさらに高める効果を持つ授業運営が、すべてのクラスで実施できるかどうかは今後の課題である。

プレゼンテーションクラスの導入の利点としては、日本語でのプレゼンテーションの経験がない学生でも、人前で発表をする自信がつき、学習の動機づけとなったことである。また、原稿作成の過程でのアクティブ・ラーニングを通じて、批判的思考を養えたことではなかろうか。

また、テーマ選びが多岐にわたっていることから、学生の学習の自由度も高く、各自の興味のあることを表すことが動機づけとなり、文章を練りながら論理構成を組み立てることを好意的に考えている学生も多かった。

このことは、合同発表会後の学生のコメントからも、他学生の発表には興味を持っており、発表したことが達成感につながっていると見受けられる。

課題点として、早急にとりかかる必要があるのは評価方法の統一である。プレゼンテーションは語彙力、文章力、文章構成力、英語の発音等、発声や姿勢を含む発表態度、さまざまな能力が必要である。それぞれをどのような配分で評価していくのかが、能力別のクラスごとに多少のばらつきがあったことがわかった。これらの評価を数値で表すことは困難であるが、できるだけ統一できるような指針を考えなければならない。

たとえば、発表会では上位クラスの学生は、ともだちの発表の内容も理解して客観的な評価をしている。これは英語圏のプレゼンテーションの知識が身についており、何が大切かを分析できる能力がついていることを示唆している。しかし、下位クラスは、内容についてはあまり理解しているとは言えず、英語もあまり聞き取れないため、声の強弱や、プレゼンターの情熱や発表している姿で評価していることがわかる。このような理解力の違いはどのように評価したらよいか。

また、全体的に文法の指導が必要であることがわかったが、下位クラスになればなるほど、各自のプレゼンテーション準備が精いっぱいで、文法指導や英語教材に触れる時間がますます少なくなる。また、「英語力」の観点からみると、英語プロパーに割くための時間が、プレゼンテーション指導にとられてしまうため、英語力増強につながっているとは結論づけ難い。

このように考慮すべき点は多いが、初年度としては、学生はアクティブ・ラーニングを用いた授業と、最終的な発表会での達成感、ともだちの発表から学ぶことで、この授業を好意的に見ており、動機づけとしてはある程度成功したのではないかと思われる。

初年度の授業の効果をふりかえることで、問題点、良かった点を洗い出すことができた。複数（15名）の教員が担当しているが、今後も授業の効果の振り返りを通じ、より効果的な授業運営をしなければならない。

参考文献

Harrington, David, & LeBeau, Charles. (2009). *Speaking of speech New edition.* Tokyo: Macmillan Publishers Limited.

板津木綿子、岩田祐子　他（2014）「全入学者対象の少人数英語教育プログラ ム―成果と課題―」2014年JACET国際大会（広島）

橘野実子（2014）「芸術専攻学生の英語プレゼンテーション力の養成」2014 年 JACET 国際大会（広島）

橘野実子 （2015）「海外研修におけるメディア芸術作品プレゼン テーションの指導」2015 年 JACET 国際大会（鹿児島）

Prince, M. (2004). Does active learning work? A review of the research. *Journal of engineering education*, *93*(3), 223-231.

関戸冬彦・安間一雄（2014）「グループプレゼンテーション大会の実践 ― その目的、効果、今後への展望」2014 年 JACET 国際大会（広島）

Appendix 1 合同プレゼンテーション評価表

♪English Presentation Evaluation Sheet♪

Your Class :_____ ID Number: _____Your Name: _____

Presenter's name	1)Topic and Content/ Any comment?	2) Did you understand well?	3) Physical? Eye contact, Physical, Posture	4) Voice Volume, Speed, pronunciation
1		Yes!	Good!	Good!
2		Yes!	Good!	Good!
3		Yes!	Good!	Good!
4		Yes!	Good!	Good!
5		Yes!	Good!	Good!
6		Yes!	Good!	Good!
7		Yes!	Good!	Good!
8		Yes!	Good!	Good!
9		Yes!	Good!	Good!
10		Yes!	Good!	Good!
11		Yes!	Good!	Good!
12		Yes!	Good!	Good!

★How to evaluate the presenters★

1) Topic and Content/ Any comment? タイトル、内容を聞き取って書いてください。また、感想も書いてください。

2) Did you understand well? 内容がよく理解できたら Yes!を○で囲んでください。

3) Physical? Eye contact, Physical, Posture 体の動き全般（Posture―姿勢（何かに寄りかかったり、ゆらゆら揺れたりせず、きちんと真っ直ぐ立っているか）床や天井ばかり見ずきちんと audience を見て棒立ちではなく時々ジェスチャーを使っているかどうか。よくできていたら Good!を○で囲んでください。

4) Voice Volume, Speed, pronunciation 声が小さすぎないか、スピードは早口すぎないか、遅すぎないか 発音は明瞭かどうか。よくできていたら Good!を○で囲んでください。

発表会全体の感想

Appendix 2 第 1 回プレゼンテーション評価表

English V Presentation

Evaluation Sheet

Date: _____/_____/_____ Presenter: _____

Your Name: _____

	Poor	Below Average	Average	Good	Excellent
Memorization	1	2	3	4	5
Posture	1	2	3	4	5
Eye Contact	1	2	3	4	5
Gestures	1	2	3	4	5
Voice Inflection (Volume)	1	2	3	4	5

Strengths(良い点):

Recommendations(改善点):

Appendix 3 Informative Presentation (サンプルスクリプト)

Presentation

The Informative Speech (sample script)

Greeting — Good morning. My name is Lisa Suzuki.

What — Today, I'd like to introduce my hometown, Portland, Oregon.

Why — This information will help you decide if you want to visit Portland during your spring vacation.

Overview Main Points 1-4 — I've divided the information into four parts. First, what's there to see? Second, what's there to do? Third, what's there to eat? And Fourth, getting around the Portland area.

Body Main Point 1 — Let's begin with the first part. What's there to see. There's always something interesting to see in Portland. For example, are you a basketball fan? Then, on March nineteenth, you can see the Portland Trailblazers play the Los Angeles Lakers. Are you a music fan? Then on March eighteenth, you can see Red Hot Chili Peppers' concert!

Body Main Point 2 — Next, what's there to do? Shopping! There's no sales tax in Oregon, so shopping is really cheap. Every spring, Nordstrom's department store has a great bargain sale. Best of all, you can go to Niketown and custom design your very own athletic shoes. You'll be really fashionable when you get back to school!

Body Main Point 3 — Next, what's there to eat? Portland has many great restaurants, but my favorite is Jake's Famous Crawfish Restaurant. Have you ever had crawfish? Well, they are delicious!

Body Main Point 4 — Finally, getting around the Portland area. Portland has great public transportation. But most importantly, you can rent a bike and bicycle almost everywhere!

Conclusion Main Points 1-4 — So in conclusion, visit Portland this spring! You can ...see an NBA basketball game! Shop at Niketown! Eat crawfish! And...bicycle everywhere!

Thank you for your attention.

Appendix 4　第 2 回プレゼンテーション評価表

English VI

Evaluation Sheet

Date: _____/_____/_____ Presenter: _____

Your Name: _____

	Poor	Below Average	Average	Good	Excellent
Memorization（暗記しているか）	1	2	3	4	5
Posture（姿勢）	1	2	3	4	5
Eye Contact（アイコンタクト）	1	2	3	4	5
Gestures（ジェスチャー）	1	2	3	4	5
Voice Inflection / Volume（声の抑揚声の大きさ）	1	2	3	4	5
Quality of Visuals（スライドの見やすさ）	1	2	3	4	5
Use of Visuals（スライドの図、表の説明の明快さ）	1	2	3	4	5

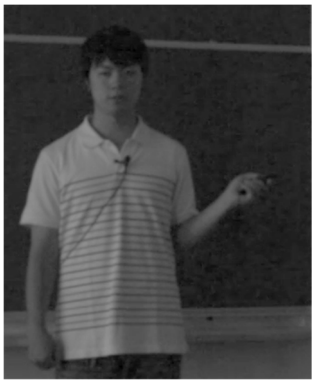
Strengths(良い点):

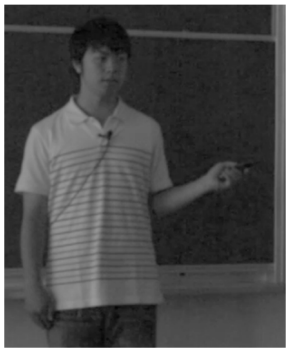
Recommendations(改善点):

Appendix 5 プレゼンテーションでみられたクラス代表によるプレゼンテーションスキル

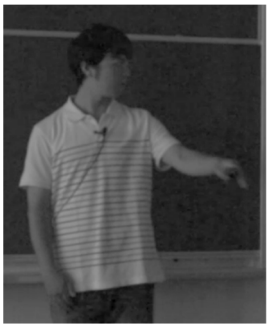
適切な立ち方・姿勢（posture）

聴衆全体に向けられた視線（eye contact）





内容に合わせ使用される多様な身体的な動き(gestures)



Appendix 6 クラスアンケート

英語VI　アンケート　　氏名：

当てはまる数字に○をつけて下さい。

5 とてもそう思う　4 そう思う　3 どちらともいえない　2 そう思わない　1 全くそう思わない

このクラスを通してプレゼンテーションでの

1. 適切な姿勢のとり方を理解した。	5	4	3	2	1
2. 適切なアイコンタクトの仕方を理解した	5	4	3	2	1
3. 多様なジェスチャーの使用法を理解した。	5	4	3	2	1
4. 声の抑揚の使用法を理解した。	5	4	3	2	1
5. 様々な資料の中から自分のテーマをサポートする資料を検索することができた。	5	4	3	2	1
6. 映像を観て話し手の用いる手法に気付きどのような効果があるか理解した。	5	4	3	2	1
7. 英語で発表するための基礎的な技術を獲得できた。	5	4	3	2	1
8. パワーポイントの効果的なスライドの作成法を理解した。	5	4	3	2	1
9. 基本的な構造（introduction、body、conclusion）を理解した。	5	4	3	2	1
10. 聴衆の前で学んだことを実際に実践することができた。	5	4	3	2	1
11. 合同プレゼンテーションに参加できてよかった。	5	4	3	2	1
12. 他のプレゼンターから学んだことがあった。	5	4	3	2	1
13. グループでの作業は役立った。	5	4	3	2	1
14. サンプルスクリプトの配布は役立った。	5	4	3	2	1
15. 今後のプレゼンテーションをする上で自信がついた	5	4	3	2	1
16. 将来的な発表の機会をイメージ出来た。	5	4	3	2	1

良かったこと

その他要望、意見等